

O-26 食道癌患者に対する多職種による肺理学療法への関わりの重要性

岡山大学医学部附属病院西病棟三階¹⁾、岡山大学医学部附属病院リハビリテーション部²⁾、岡山大学医学部第一外科³⁾、岡山大学医学部保健学科⁴⁾
斎藤佳代¹⁾、近藤ひろ子¹⁾、築山尚志²⁾、羽井佐実³⁾、猶本良夫³⁾、森恵子⁴⁾

＜目的＞食道癌手術は侵襲が大きい手術であり、加えて、低栄養、低肺機能、高齢者に対して行われることも多くなっている。当院では、医師、看護婦、理学療法士が連携して術前、術後の肺理学療法に関わっている。今回は各専門職が関わることの重要性を明らかにすることを目的としてこの研究を行った。

＜方法＞各専門職の役割と、専門職が関わることのプラス面、マイナス面を明らかにするために半構成的質問用紙を作成して対象患者にインタビューを行い、患者自身に3職種の関わりを評価してもらう。

＜対象＞A氏 54才。平成12年11月に食道癌で食道亜全摘術を施行。術前肺機能はFVC3390ml、一秒率は76.8%。喫煙歴は34年。術前の呼吸訓練は自己判断で中止。術後は様々な合併症、縫合不全、肺炎、出血をきたし、三度の緊急手術を受けた。肺炎予防のために気管切開下で呼吸管理を行う。この症例に対して、急性期には医師が体位ドレナージ、タッピングを行い、急性期を脱した頃から理学療法士もスクイーピングをはじめとした関わりを持った。看護婦は体位ドレナージ、タッピング、排痰援助を行った。

＜結果＞1.職種の役割について：医師は指導者、看護婦と理学療法士は、実践者の役割にとらえられていた。理学療法士は看護婦に対しては肺理学療法の指導者でもあった。また患者はこれらの役割を今後も維持して欲しいと考えていた。2.3職種が関わることの効果：自分の病気を様々な人が支えてくれるという安心感があった。連携して一貫した援助が受けられると、日常生活の中にもそれが取り入れられたが、そうでない場合は、言うことが異なり、混乱したことがあった。3.意

欲の変化：術前呼吸訓練をきちんとしていれば、もっと楽に回復できたのではないかという後悔がある。術後の身体的苦痛が強いときは、意欲的でないときもあったが、その時々、説明と励ましを受け、肺理学療法に取り組んだ。

＜考察＞1.3職種の役割と多職種による関わりの効果：患者は3職種の役割についての考えを持っておりその連携が十分取られることが、効果的な肺理学療法につながると考えている。各職種が専門的役割をもって患者に関わるためには、それぞれの職種が肺理学療法において果たす役割を自覚することが必要である。また、各職種が情報交換を積極的に行うことは患者の状態にあわせた計画的肺理学療法の実施につながると考えられ、またそれは、自分を多くの人が支えてくれているという安心感につながり、回復への意欲につながっていくと考えられる。

2.心理的变化について：身体的状態により、肺理学療法に対する意欲は変化するが、患者が正しく認識するためには、頻回の説明と励ましが必要である。また、患者の心理的状态についても、3職種間で共有していくことが、患者の理解に重要である。

＜結語＞1.食道癌患者に対する肺理学療法を多職種で関わる場合、各職種間の連携と情報交換が重要となる。2.3職種で肺理学療法に関わる場合、一貫性が重要で、各職種が独自の方法で独自に関わることは、患者に不安を与え、意欲の低下につながる。3.患者の心理的、身体的状態についての情報を3職種間で共有することは患者主体の計画を立て、実施する上で重要となる。4.3職種が共通の目的を持って関わることは、患者の意欲の向上につながる。